

富山県教育委員会教育長 殿

富山県立小杉高等学校
校長 亀遊 知子

令和5年度学校総合評価を別紙(様式5)とともに提出します。

令和5年度 学校総合評価

6 今年度の重点課題に対する総合評価

これまでの授業改善に係る実践研究の成果をベースに、より一層の教員の指導力向上を図るとともに、学習のみならず、学校生活全般にわたって主体的・協働的に活動できる生徒の育成に努め、生徒の多様な進路実現を着実に支援する指導の改善・充実に重点的に取り組んだ。また、本校が育てたい生徒像(小杉高等学校グランドデザイン)に基づいて、生徒の自己評価(小杉高等学校 Graduation Policy)も行った。

(1) 基礎基本の徹底

将来の社会生活の基盤となる基本的な生活習慣の定着を重点として取り組んだ。具体的には、あいさつ、早寝、睡眠時間の確保、朝食の摂取、携帯電話の利用等について日常的に指導し、生徒に定期的にアンケートを行って自分の行動を振り返り適切な行動を考える機会を設けた。

あいさつについては、生徒指導部長を中心に数名の職員が生徒玄関で挨拶をする取り組みが毎日行われており、他にも地域のあいさつ運動への参加、全職員参加による玄関指導、そして生徒会が自発的に企画したあいさつ運動等、数多くの活動が行われており、明るく挨拶を交わす雰囲気ができつつある。

また、早寝、睡眠時間の確保、携帯電話の利用についても、全ての学年で年度当初に比べ良い方向に変化した。ただし携帯電話の利用については、全ての学年で遅い時間帯に使用している生徒の割合が高く、改善が求められる。

(2) 実効性のあるキャリア教育の推進

3年間を見通したキャリア教育を計画的、継続的に行い、職業観を育み、進路意識の向上に努めた。上級学校訪問、大学学部学科調べ、射水市政出前講座、県外進路研修、社会人班別講話等を実施したが、1、2年生の約8割の生徒が「進路選択の参考になった」と答えた。また、3年生は9割以上の生徒が「進路決定先に満足している」と答えている。また本校では、計画的に高校生活を送るため生徒に手帳の活用を勧めているが、活用できたと答えた生徒の割合は目標の6割に達しなかった。メモすることのメリットを折に触れて伝えていくとともに、生徒会が自発的に始めた「手帳を用いての学習時間調査」のような活動を支援していきたい。

(3) 多様な進路実現に向けた学習機会の充実

観点別評価への理解が進み、到達目標、評価基準を明確にした上で、生徒に主体的に考えさせる授業が行われている。また学校行事やホームルーム活動、委員会活動では、生徒会役員やクラス委員を中心に主体的に行えるよう教員が細やかに支援しており、自己達成感を持つ生徒が全校生徒の9割以上となった。授業、特別活動ともに、進路実現に向けた幅広い学びの機会となっている。

(4) 教員の指導力・学校組織力の向上

タブレット等のICT機器を授業で日常的に活用している教員は9割以上となり、生徒自身の振り返りや課題の集配に使っている教員は65%以上となった。教員同士、あるいはICT支援員と教員がICT機器の効果的な利用について話し合っているのをよく見かけるようになっており、学校ぐるみでの授業改善が進んでいる。

7 次年度へ向けての課題と方策

本年度は、「小杉高等学校グランドデザイン」を基に、各教育活動を通して、「身に付けさせたい8つの力(①実践力・②協働力・③探究力・④発信力・⑤創造力・⑥自主性・⑦人間関係形成能力・⑧自己管理能力)」を明確にし、その中で「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力」「学びに向かう力、人間性」の育成と涵養に努めてきた。しかしながら、まだ自ら課題を見つけ、深く思考し、仲間と果敢に解決に立ち向かう生徒の育成には課題が見られる。次年度も引き続き、全教職員で共通理解を図りながら取り組んでいく必要がある。

令和5年度 小杉高校アクションプラン - 1 -

① 重点項目	学習活動（学びに向かう生徒の育成）
② 重点課題	主体的・対話的で深い学びを引き出す授業改善に向けた生徒・教員への支援
③ 現 状	<ul style="list-style-type: none"> ・主体的、対話的で深い学びを引き出すため、ICT機器の活用促進や公開授業研究会による研究・協議を通じた授業改善に継続的に取り組んでいる。 ・ICT機器を教員・生徒が授業や評価で有効に活用できるよう、校内研修等を通じて情報・ICT教育係が活用方法に関する支援をきめ細かく行っている。 ・新課程学習指導要領に伴う観点別評価への対応は、実施方法の適正な在り方について研究を継続・進展させている。
④ 達成目標	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒…授業に臨む姿勢(主体的な学習態度)や家庭学習のやり方についての自己評価に向上が見られたか。(年度比較・学期比較) ・教員… ICT機器を活用し、観点別評価に基づく授業計画を進め、授業改善に関する自己評価に向上が見られたか。(年度比較)
⑤ 方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・学期毎の学習診断シートをFormで行うことにより、集計結果(年間5回)を担当が面談等で迅速に活用できるようにする。 ・昨年に引き続き授業改善の取り組む上で、①ICT機器の活用 ②観点別評価への対応を改善し、教員の自己評価を向上させる。
⑥ 達成度	達成目標に対する生徒の自己評価と教員の自己評価について、Form等のアンケートにより集計し、そのどちらにも改善・向上が見られること。(数値平均だけでなく項目毎の変化傾向の分析も含む)
⑦具体的な 取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒…ICT機器を活用した学習状況の振り返りや、学習診断にもとづく担任面談により授業に臨む姿勢や家庭学習のやり方についての自己評価に向上が見られる。 ・教員…校内ICT研修会の受講やICT支援員(月2回来校)の積極的な活用により、教科指導のみならず校務全般で日常的にICT活用が促進されている。
⑧ 評 価	<p>B</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の自己評価…授業に臨む姿勢や家庭学習のやり方等各項目で「あてはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した生徒の比率が、年度比較で増10同3減8、同年比較で増12同1減8と増加・向上傾向が見られた。 ・教員の自己評価…授業改善(3.2→3.2)平均0.3ポイント上昇が3項目、ICT活用は「よく活用している・活用している」の割合増、観点別評価は評価方法と準備の項目が向上した。
⑨学校関係 者の意見	ベテラン教員の中には、これまで身につけてきた指導方法で十分だと思っている方もいるかもしれないが、その指導方法とICTを結びつけることでさらに良い指導ができるような研修等の仕掛けを行うとよい。
⑩次年度へ 向けての 課 題	学力向上のためのICT活用について一定の成果はあったが、ICT機器に頼らない従前の学習指導においても、その指導力を低下させずに過去の資産を有効利用するための具体的な取り組みと研究を続ける。

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった)

令和5年度 小杉高校アクションプラン - 2 -

①重点項目	学校生活（生徒指導）
②重点課題	社会生活の基盤となる基本的な生活習慣の確立
③現 状	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地元の中学校からの入学者が半数程度いるが、県内の広い地域からの生徒で構成されている。 ・ 女子生徒が全校生徒の約75%を占め、生徒の多くは、穏やかで素直な生徒が多い。 ・ 生徒の中には教職員にしっかりと挨拶ができない者がいる。また、挨拶を交わしても声が小さかったり、うなずくだけの生徒も多くいる。 ・ 時間厳守、服装など、指導を要する生徒が一部見られる。 ・ 天候や環境等の状況によっての変動を踏まえ、先を見越した余裕を持った主体的な行動がとれない生徒も見られる。
④達成目標	毎日、来校者や教職員、友人と自ら気軽に挨拶を交わせた生徒の割合
	80%以上
⑤方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全教職員が一体となり、生徒指導上の問題や課題の解決、改善に向けてしっかりと取り組むとともに、学校全体としてルールやマナー等を守っていきこうとする機運を高める。 ・ 毎朝、生徒指導主事等が生徒玄関において生徒の登校指導を行い、挨拶、服装、時間厳守等と呼びかける。 ・ あいさつに関するアンケート調査を行い、実態把握に努めるとともに、改善点を明確にし、自ら挨拶を交わすことができる生徒を育成していく。 ・ 生徒会執行部と自律委員会が中心となり、適宜、朝の挨拶週間を設けるなど、主体的な活動を充実させる。 ・ 元気な挨拶については、生徒会執行部や自律委員会が全校生徒に向け、提案や啓発活動を行い、生徒自らが元気な挨拶ができるよう意識を高めさせる環境づくりを積極的に行っていく。
⑥達 成 度	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「あいさつ」に関するアンケート結果より、学校で教職員や来校された外部の方に「あいさつ」を行うという生徒の割合は約98%であった。また、自分から人に挨拶をすることは難しくはないと思っている生徒の割合は約85%であった。
⑦具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ・ 毎朝、生徒指導主事の他、管理職を含めた有志教員による玄関指導を実施。 ・ 4月、9月に地元三ヶ地域自治振興会主催による小杉駅前での地域住民と生徒会執行部や教員による挨拶運動の参加。 ・ 学期毎に全教員による登校時の玄関指導を実施。 ・ 5月、10月に生徒会執行部と自律委員会主催による生徒中心の挨拶運動の展開。 ・ 9月にPTA生活指導・家庭教育委員会と教員主催による生徒玄関前及び通学路交差点での登校指導の実施。 ・ 12月に全校生徒に「あいさつ」に関するアンケート調査の実施。 ・ アンケート調査結果を基に、生徒会執行部と自律委員会で改善点を整理し、今後に向けて生徒主体による取り組みについて協議。
⑧評 価	B 社会生活の基盤となる基本的な生活習慣の確立「あいさつ」の指導では、PTAも含めた学校全体で組織的に取り組むことができた。
⑨学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none"> ・ あいさつ等、自分をしっかり表現できるよう指導を継続してほしい。またこのような指導のおかげか、小杉高校生の制服の着こなしが良くなっていると感じる。
⑩次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒会が中心となって、適宜、朝の挨拶週間を設けるなど、生徒による主体的な活動を充実させていく。また、生徒会執行部や自律委員会が全校生徒に向け、提案や啓発活動などを行い、生徒自らが元気でさわやかな挨拶ができるよう意識を高めさせる環境づくりを積極的に推進していく。 ・ 学校全体としてのルールやマナー等を守ろうとする機運を醸成していく。

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった)

① 重点項目	学校生活（保健指導）	
② 重点課題	基本的な生活習慣の確立と生活時間の自己管理能力向上	
③ 現 状	<ul style="list-style-type: none"> ・自分自身の健康自己管理は生涯にわたって必要であり、生活習慣を見直す機会となっている健康セルフチェックでも生徒が各自自分の生活習慣や時間の使い方について見直し改善する意識は高くなっているが、特に休み明けに睡眠不足や欠食などで体調を崩し、欠席したり保健室を訪れる生徒が増える傾向にある。 ・新型コロナウイルス感染症が5類に移行し、今後は今まで以上に自己の体調に関しての自己決定・自己管理が必要となってくるので、自主的に健康管理をコントロールすることの重要性を認識させたい。 	
④ 達成目標	<ul style="list-style-type: none"> ・毎朝健康観察記録を行い、基本的な感染対策を含む体調管理を意識して取り組むことができるとともに、健康的な生活を目指し、健康的な生活の基本である「早寝、早起き、朝ご飯」の定着や生活時間の適切な使い方を意識させる。 	
⑤ 方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・毎日の健康観察を通して自分の体調を常に自己管理できるように促す。 ・定期的に健康セルフチェック強化週間を設け、アンケートを通して自己評価を行うとともに体調の自己管理や、生活習慣と時間の使い方改善の意識を高める。 ・学校保健委員会や健康講話、保健だよりを通して生活習慣の重要性や時間の使い方について考える機会を増やし、学校と家庭の連携に努める。 	
⑥ 達成度	<ul style="list-style-type: none"> ・健康セルフチェックの結果、概ね数値は良い方向へ向上した。生徒の振り返りにもあるように、特に携帯の使用に関する意識が高まっているように思われる。しかし10時までに終了する生徒の割合はまだまだ低く、継続的な指導が必要である。 ・大きな伸びにはあらわれていないが生徒の振り返りを見ると、生活習慣を整えること、携帯使用の自己管理について意識していると思われる。 	
⑦具体的な 取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ・健康セルフチェックを4回(5, 7, 10, 12月)実施するとともに、毎回簡単に振り返りを記入させた。 ・保健だよりセルフチェックの結果を一部掲載し、保護者会に配布して普段の生活を振り返る一助とした。 ・学校保健委員会では、学校医の高橋先生より健康的に生活を送るためにはどうすればよいかについて講演をしていただいた。 ・健康セルフチェックの結果や生徒の感想を1月にPTA保健委員に配布し、保護者としての意見を聞いた。その中には、携帯に関するルールをしっかりと決めている家庭や逆に携帯の使用の指導に悩んでおられる家庭、この取り組みを通して子供達に規則正しく生活することの必要性を教える指導を今後も継続してほしい、などの意見があった。 	
⑧ 評 価	B	<p>全体的に、概ね意識できた、若しくはできつつある割合がどの項目も向上した。ただ、時期によって生活リズムの乱れ(学校生活の慣れ・受験・考査等が原因か?)からか睡眠が十分に取れていなかったり、朝食がしっかりと摂れてないなどが見受けられる。今後、家庭とも連携して生活リズムを整えることの意識を高めていきたい。</p>
⑨学校関係 者の意見	<ul style="list-style-type: none"> ・睡眠時間、早寝、朝食、携帯電話の使用を中心に自分の生活習慣を振り返らせるこの取り組みを今後も継続し、人として大切なことを高校時代にしっかり身につけてほしい。 	
⑩次年度へ 向けての 課 題	<p>今後も継続的に時間の管理や自己管理能力をどのように育てていくかが課題である。家庭との連携に加えて生徒同士が話し合う機会も取り入れていきたい。生徒たちは少しずつ生活習慣を整えていくことを意識してきているので、次年度もこの取り組みを継続して行っていきたい。</p>	

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった)

令和5年度 小杉高校アクションプラン - 4 -

① 重点項目	進路・キャリア支援										
② 重点課題	3年間を見通したキャリア教育の推進と進路実現										
③現 状	<ul style="list-style-type: none"> 具体的な進路目標のない生徒や将来やりたいことがわからない生徒がいる。具体的な進路目標が定まっても自主的、意欲的に学習に取り組まず、学力不足のまま入試をむかえる生徒も見られる。 自己管理のための「手帳」は3学年になると活用頻度が増えるが、1、2年生は活用しきれていない。 										
④達成目標	1・2年生 「産業社会と人間」や「総合的な探究の時間」が、系列選択や自分の生き方・考え方などの参考となったと考える生徒の割合	3年生 進路決定先に満足している生徒の割合	全学年 高校生活を過ごす上で手帳を活用できたと考える生徒の割合								
	85%以上	80%以上	60%以上								
⑤方 策	<ul style="list-style-type: none"> 3年間を見通したキャリア教育を計画的、継続的に行い、職業観や就業観を育み、進路意識の向上をはかる。 継続的な個別面談を行い、早期に進路目標を設定したり、学習意欲を喚起したりする。小杉高校GP自己評価を行い、その結果を個人面談や進路指導に活かすことで、多様な生徒の進路実現につなげる。 「手帳」を活用することにより、スケジュール管理をし、自分の行動を振り返る習慣を身に付け、自ら学び主体的に行動できる生徒を育成し、生徒の進路実現を目指す。また、タブレットPC等のデジタルツールの効果的な活用方法を探る。 										
⑥達 成 度	<p>「はい、どちらかというとはい」と回答した生徒の割合（1、2年のみ2学期末調査）</p> <table border="1"> <tr> <td>学年別達成目標</td> <td>1年 89.1%</td> <td>2年 79.5%</td> <td>3年 92.2%</td> </tr> <tr> <td>全学年共通達成目標</td> <td>1年 27.6%</td> <td>2年 37.8%</td> <td>3年 40.5%</td> </tr> </table>			学年別達成目標	1年 89.1%	2年 79.5%	3年 92.2%	全学年共通達成目標	1年 27.6%	2年 37.8%	3年 40.5%
学年別達成目標	1年 89.1%	2年 79.5%	3年 92.2%								
全学年共通達成目標	1年 27.6%	2年 37.8%	3年 40.5%								
⑦具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> 「産業社会と人間」と「総合的な探究の時間」に上級学校訪問、大学学部学科調べ、射水市政出前講座、系列科目登録説明会、県外進路研修、社会人班別講話、進路ガイダンス等を実施し、生徒の系列選択や進路意識を高めた。 1年生に対しては、新入生オリエンテーションを通して、手帳の活用を呼びかけ、各授業や担任との面談時に持参するように促した。また、手帳の活用本を各クラスに設置したり、「手帳の使い方」を廊下に掲示したりした。 										
⑧評 価	B	<ul style="list-style-type: none"> キャリア教育関連の目標について、1年生は達成、2年生もほぼ達成したといえる。3年生の進路目標は達成した。 手帳の活用については学年が上がるるとともに割合が高くなる。昨年度より数値目標を下げたものの達成できなかった。 									
⑨学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none"> 毎回の授業の終わりに印象に残ったキーワードを手帳に書かせたところ、考査前の学習に役立ち好評だったという話があった。小さなことからやらせ、そのメリットに気づかせると手帳の使用頻度が高まるかもしれない。 										
⑩次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> 本校の3年間を見通したキャリア教育は生徒の進路実現に大いに貢献しているので、次年度以降も継続していきたい。 生徒会が中心となり、学習時間調査のため、手帳の活用を促し始めた。生徒の自発的な取り組みにも期待したい。見通しをもって高校生活を送るためにも、今後も学級や教科の時間に常時携帯させ、アナログではあるが、メモをとることを意識させるとともに、デジタルツールの活用を含めた達成目標にするといいかもしれない。 										

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった)

①重点項目	特別活動	
②重点課題	特別活動やボランティア活動など生徒の自主的な活動の充実	
③現 状	<ul style="list-style-type: none"> ・学校行事やホームルーム活動、委員会活動において生徒会役員やクラス委員を中心に新たな企画の提案や取り組みを意欲的に行っており、主体的に活動する機会が増えている。 ・部活動やボランティア活動に熱心な生徒がいる一方で、特別活動が学校生活を充実させたという意識が低い生徒が1割以上いる。 	
④達成目標	学校行事や各種特別活動に自主的に取り組み、自己達成感を持つ生徒の割合	学校生活を充実したものにするために、実際に行動したことがある生徒の割合
	90%以上	90%以上
⑤方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒会執行部と各委員会・クラス・部活動などが連携して活動を企画し、組織としての生徒会活動をより活性化させ、生徒の参加意欲を高める。また、体育大会、学校祭等学校行事では「一人一役」とし、役割意識を高めるとともにリーダー育成に努める。 ・部活動に関する問題点を洗い出し、自主的な運営方法など改善策について検討する。 ・校外清掃活動や地域行事への参加など生徒が人々の役に立ち喜ばれる機会を設けるとともに、ボランティア活動に関する情報をできる限り発信し参加する機会を増やす。 	
⑥達成度	<ul style="list-style-type: none"> ・自己達成感を持つ生徒の割合については、体育大会と学校祭、部活動から考察した。それぞれの活動の満足度と自己達成感との間に相関があると考えた。資料①、②から体育大会と学校祭の満足度や役割については、満足とまあ満足を合わせるとどちらも90%を超える。また、部活動は資料③、④より、所属している生徒の中の満足とまあ満足の割合が運動部と文化部、同好会のいずれも90%を超えている。 ・実際に行動したことがある生徒の割合は、資料⑤から考察した。特になしと回答した生徒が31人（462人中 6.7%）であった。今年度は学校祭もあり、行事による関わりが例年より多かったことが、特になしの減少に繋がったと思われる。 	
⑦具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ・体育大会では、「一人一役」となるよう部活動ごとに係の仕事割り当てた。昨年の反省を踏まえ、未加入の生徒にも仕事を割り振ることができた。また、体育大会と学校祭の役割について比較すると、やり遂げた割合は学校祭が小さい。これは、仕事の割り振り方の違いが影響しているのではないかと推測される。 ・資料⑤より、過年度比較してみるとあいさつで増加傾向が見られる。今年度、育成指導部では、あいさつに重点を置いて活動していたこととの関連があると思われる。また、ボランティアも外部からの依頼も増えてきており、関心を持つ生徒も増えてきている。 ・生徒会執行部では、委員会と連携を取りながら活動しているものもいくつかある。関わる生徒の数が増えることで、活動の広がりにつながっていると思われる。 ・部活動では、それぞれの部の目標をたて、それに見合った活動していることが不満の割合の減少につながっていると思われる。ただ、3年生の未加入の割合が20%と高い。 	
⑧評 価	A	2つの達成目標について、数値な目標はクリアしている。このことから、今年度は目標が達成したと考えた。
⑨学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none"> ・こども食堂でのボランティアをはじめ、地域で数多くのボランティア活動に参加してもらっている。今後も教育の場として地域を活用してもらいたい。 	
⑩次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> ・あいさつからもわかるように、生徒の学校や生徒会の取り組みに対する反応は敏感である。次年度は学校祭という大きな行事がなく、普段の活動が重要となってくる。生徒会執行部だけでなく、他分掌とも連携を取りながら、どんな活動を仕組んでいくか、どう生徒に関わらせていくかが課題である。 ・今年度、大きな災害がありボランティアという言葉がより一層近いものとなった。この機会を捉え、自分たちにできることを災害ボランティアだけでなく、広くボランティア活動関心を持たせるよう啓発していきたい。 ・部活動は強制して継続させる活動ではないことが前提だが、少しでも魅力的な活動となり、最後まで続けたいと思える活動にしていくことが課題である。 	

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった)